

## 海外 稲門会の躍動

Overseas TOMONKAI

### 会長メッセージ

このパースは、オーストラリアの3分の1の面積を有する西オーストラリア州の州都。資源国オーストラリアのなかでも、日本の戦後復興の源となった鉄鋼生産に欠かせない鉄鉱石の一大産地。さらには金、ニッケル、ダイヤモンド、そしてLNG（液化天然ガス）、原油など地下資源の宝庫です。こういうと何か殺風景な土地をイメージされるかもしれませんが、あの兼高かおるさん(1959年から30年にわたってTBSで放映された『兼高かおる世界の旅』が有名)をして、「世界で一番美しい街」と言わしめた所です。人口は約170万人強、世界で最も大都市

から離れた大都市といわれています。私は1990年代前半に日本の商社会社の駐在員としてパースで勤務し、すっかりこの土地が気に入り、その後他国での勤務も経験しましたが、7年ほど前にリタイアすると同時に舞い戻った次第です。現在の生活はオージー仲間と週2〜3回のゴルフ、野菜栽培、さらには、とくにこれが重要なのですが、毎晩の晩酌でワインからポリフェノールを摂取し、もっぱら健康維持に努めています。

二重作富彦(1969年理工)

### 会員からのメッセージ

日本に住んでいる国民の98パーセントが日本生まれという人口構成がそうしたイメージをつくっていると思います。でも、日本人自身(私も含め)がそういう認識をもたずに、長時間英語を習っていたのに、国内ではほとんど使う機会がなく、どんどん忘れていくばかりでした。教科書で読み書きから英語学習をスタートする日本の英語教育と、たくさん異国人から英語で話しかけられるところからスタートする国の英語の覚え方はまったく違いました。15年以上外国で生活する者として、この経験は語らざるにはいられません。

中村健太郎(1961年政経)

サラリーマンを辞めてパースに移住してから20年、永住者ということで万年パース稲門会の総務を担当しています。まだ、パースに在住する校友のパース稲門会への加入率が低いように感じています。この記事でパース稲門会の存在を知っていただき、一緒に活動できる仲間が増えることを祈念しています。

鈴木竜一郎(1987年商学)

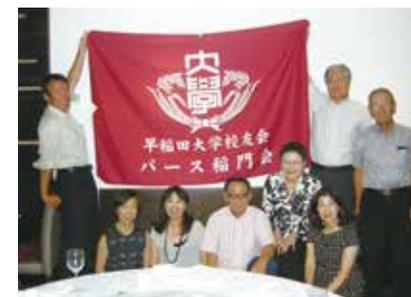
海外生活は4カ国通算20年を超えました。この国でも稲門会は心のよりどころでした。母校の長い歴史と伝統とそれに育まれた多彩な先輩、後輩との交流を心の支えにしています。

前嶋茂明(1975年商学)

### パース稲門会について

パース稲門会はまだまだ若く、かつて経済企画庁長官を務められた寺澤芳男さんに音頭をお取りいただき2009年に発足。寺澤さんは既に帰国されましたが、その後も会員の相互親睦を深めるべく活動を続けています。毎年数回、懇親会を行っており、2010年1月には、寺澤芳男名誉会長の同級生だった校友の岡村喬生さんをお呼びして、「日豪友好チャリティコンサート」を開催しました。2015年はゴルフコンペを開催する予定です。パースでの日本人駐在員数はこのところ増加傾向にあり、現在の会員数は12名。これからパース稲門会の発展を目指していきます。

二重作富彦(1969年理工)



新年会

### パースの魅力

西オーストラリア州の州都であるパースの魅力は、何といても温暖な気候です。地中海性気候で夏は高温になりますが、乾燥しているので過ごしやすく、冬も朝晩冷え込むときはありますが、日中コートが必要なことはほとんどありません。もちろん雪は降りません。イギリスからの移民がパースから離れられない最大の理由は、その晴天率の高さにあるそうです。日照時間が長く、日中の寒暖差が大きいため、果物、とくにブドウの生育に適しており、パース近郊にはたくさんのワイナリーがセラーを構えています。それらを1軒ずつ訪れてテイस्टィングをするのも楽しく、高品質なワインが比較的に安価で味わえるのがうれしいです。

9月から10月には世界中のワイルドフラワーの70パーセント以上が西オーストラリア州で咲くということで、世界中のワイルドフラワーファンが西オーストラリア州を訪れます。11月には南極観測船「しらせ」がフリーマントル港に寄航し、地元の日本人との交流が行われます。ゴルフやマリンスポーツなどのレジャーも日本より気軽に楽しむことができます。

パースの魅力を上げるときがあります。2011年より日本からの直行便が飛んでいないのが残念なところ。日本から8,000キロメートル、シドニーからも4,000キロメートル

離れている孤立した都市なので、なおさら不便に感じてしまいます。2015年1月に日豪EPAが発効したのを機に、直行便の復活がうわさされており、実現を期待しているところです。

鈴木竜一郎(1987年商学)



ワイナリー巡りが楽しめる

1 2



1.インド洋の前にラクダ乗り 2.パース

主人の定年後、1999年からパースに住んで16回目のクリスマス、お正月を迎えました。1992年に心筋梗塞になった主人の「定年後はストレスのない所で、毎日ゴルフをして過ごしたい」という希望に沿って、カナダ、ハワイ、オーストラリアなど移住地を検討した結果、安全で時差がなく生活費の安いパースになりました。

こちらでは、ゴルフウィドウになりたくないと始めたゴルフと、学生時代から続けてきた合唱を楽しんでいます。日本人合唱団(女声)と地元混声合唱団で歌っています。ゴルフと合唱ができなくなったときに、帰国するときと決めています。

中村順子(1963年文学)

パースに来て気づかされたことは、日本という国が非常に特殊な国だったということです。